

続・衆議院議員に血液型の特徴が見られるかIII

—O 型の議員についての分析—

○大村政男 浮谷秀一 藤田主一
(日本大学) (東京富士大学) (日本体育大学)
血液型O型 日本陸海軍 古川竹二

Continued : Is there any characteristics of Blood Type distribution among the member of The House of Representatives?III

—An Analysis of The O type Parliament Member—

Masao Ohmura Shuuichi Ukiya Shuichi Fujita
(Nihon Univ.) (Tokyo Fuji Univ.) (Nippon Sport Science Univ.)

Keywords : Blood type O Japan Army · Navy Takeji Furukawa

1 史的展望 わが国における血液型と気質性格問題は原来復・小林栄による『医事新聞』954号掲載の論文「血液ノ類属の構造ニ就テ」(1916)に始まる。その後、日本陸軍の平野林(三等軍医正/少佐のこと)と矢島登美太(二等軍医/中尉のこと)が第7回日本医学会の軍陣医学部会(1926)で「隊附勤務中ニ於ケル二三の研究結果ニ就テ」を発表している。この発表は3ヶ月後に『軍医団雑誌』157号に「人血球凝集反応ニ就テ」という論文になっている。そのなかに「B型所有者ニ優秀ナル兵卒ノ多数ナルハ注目ニ値スルトコロナリ血液型ニ依リ素質ヲ異ニスルコト明カナレバ将来研究ヲ要スベキモノナラン」という一節がある。これは西欧における人種差別(有色人種即B型人種蔑視思想)に動機づけられたものである。日本人はこれから現代までこの西欧の偏見に振りまわされることになる。日本の陸海軍における血液型と気質性格の研究は1926年以降ひとつの流行になっていった。いくつもの研究のうちで興味深いものは次のとおりである。

(1) 三八式歩兵銃による射撃成績ではO型がいちばん優れている。(2) 柔剣道や野球・バスケットボールのような体力や機敏性を要する運動はB型とO型が優れている。(3) 体操・馬術・遠泳・マラソンのような技術や忍耐性を要する運動はA型とAB型が優れている。(4) 人間関係では一般にO型はどの型にも好まれやすいがB型は疎まれる傾向がある。

われわれは、この4項目は粗雑な研究が多かった軍医たちの研究のうちの最も注目すべき発見だと思う。

2 古川竹二とO型 古川竹二には『血液型と気質』という大著(彼の大正時代末期から昭和の初期の研究をまとめたもの)がある。この本はのちの能見正比古と養嗣子俊賢の血液型人間学の最大の下敷きになるものである。しかし、正比古は『血液型エッセンス』('77・昭和52刊)で古川を抹消しているのである。彼は「血液型の違いが、人間の行動や表現を大きく左右している歴然とした事実を目にしなが、30年近く疑い迷いつづけてきた。やっと納得したのは、せいぜいこの7、8年来のことである。」と書いている。俊賢も大西赤人との対談のなかで「とにかく今まで誰も比較対象として考えなかった血液型と人間の行動性・社会の現象の間に、こんな風に偏りが出ました。どんな意味があるんだろう。共に考えたい、調査して行きましょう—こういうテーゼを出しているんであってね。何かが決まったなんて誰も言っていないし、言える時点でももちろんないし(後略)」「『血液型』の迷路』(1986)と述べているのである。古川はどこにいったのであろうか。

正比古は古川がO型の積極性を「尋常ならざる行為を行ふ勇氣ある人に、積極的気質者がより多い事は当然の事であらう」と結んでいるのに対し、「善にも強く悪にも強いO型」としている。正比古の表現は文筆家だけあってスマートである。しかし、二番煎じであることには変わりがない。

古川はA型を白人優位と絡ませて前面に押し出した西欧の

学者に対抗して、O型優位を(B型優位とともに)主張したのである。それはHirschfeld夫妻の生物化学的人種系数(A%+AB%/B%+AB%)に対抗して民族性系数、のちの団体気質(O%+B%/A%+AB%)を提示したことで容易に納得することができるであろう。

3 能見正比古の誤謬 正比古は第34回総選挙で当選した453名の衆議院議員(代議士)の血液型分布を『血液型政治学』に載せている。われわれはこの結果の検定を72回大会論文集に掲載している。すなわち、 $\chi^2=26.81 > 11.345, df(4-1)(2-1)$ 、片側検定で帰無仮説を棄却することができたのである。帰無仮説は $p < .01$ で棄却されたことになるのであるが、 $p < .01$ という危険率は帰無仮説が正しい場合、誤って棄却する誤謬(第1種の誤謬)が生じる確率は100回の見本抽出で1回以下ということを示している。正比古の政治家O型説の記事は好事家たちによって興味津津に取り上げられ、中国の血液型本にも載ることになる。

しかし、この $p < .01$ の結果は草野直樹による調査(第40回総選挙の当選者420名)や我われの調査(郵政解散以前の議員459名・郵政解散直後の議員464名)で崩れてしまうのである。100回に1回は違った結果が出るかもしれないというのに3回も可笑しい結果がすぐ現われてきてしまったのである。しかし、これは能見正比古の誤謬とはいえない?かもしれない。推計学によるこのような処理は心理学の研究で日常茶飯事で行なわれているのである。

4 推計学的処理は信頼できるか *Scientia non est individuorum*, 科学は個性的なものではない—という言葉がある。G.W.Allportは、1937年の著書にも1961年の著書にもこのことばを載せている。このことばから最初に受ける印象は、科学は*nomothetic*なもので*idiographic*なものではない—ということである。そこで多量のデータを収集し、代表的傾向を発見することが必要になってくる。推計学はその際の手っ取り早い道具になる。現在その道具になる権威的なソフトにはこと欠かない状況にある。学会発表でもレフリーペーパーにおいても $p < .0001$ といったような超超級の危険率を付けた研究やアスタリスクを4個も5個も行列させた資料が見られる。推計学は見本の背後にある見えない母集団をたしかに数的に推定しているのであろうか。相関係数(r)の強さと信頼度の取り違えはレフリーペーパーにおいても散見されている。編集委員会の意見が統一されていないのか。

5 結論にかえて 平成19年7月24日付の『朝日新聞』は「免許講習で血液型で事故判定」という大見出しで、「福岡自動車運転免許試験場の講師が「車の事故を起こす確率は血液型ごとに違う」との内容を講演し批判を受け撤回した。交通事故と血液型については、追突事故、交差点における出会いがしらの事故、歩行者に対する人身事故にO型が有意に関与していること($p < .01$)がA I U保険会社の資料で明らかになっている。心理学は*double standard*を持つのか?